世界中の子どもたちへ。

Lindgren loved by the Swedish

ピッピの生みの親

リンドグレーンが愛したスウェーデン

児童文学作家としてだけではなく、社会のオピニオンリーダーとして、そして一人のスウェーデン人として、スウェーデン国民が心から敬愛する女性、アストリッド・リンドグレーン。「長くつ下のピッピ」「やかまし村の子どもたち」「ロッタちゃんシリーズ」など、日本でも絶大な人気を誇るリンドグレーンの作品と、彼女の生き方を通して、スウェーデンという国を見つめます。

監修：齋藤惇夫

作家・児童文学者。福音館書店の専務取締役（編集責任者）として子どもの本の編集に携わり、2000年に退社、創作活動に専念。著書に『グリックの冒険』（岩波書店・日本児童文学者協会新人賞受賞）、『冒険者たち』（岩波書店・国際アンデルセン賞優良作品賞受賞）、『ガンバとカワウソの冒険』（岩波書店・野間児童文芸賞、国際アンデルセン賞優良作品賞受賞）、『哲夫の春休み』（岩波書店）などがある。

取材協力：岩波書店

3

一人の強さと家族の絆

一人は強い

Ensam är stark（一人は強い）

――スウェーデンの諺です。自分で自分を管理し、判断し、責任を取ることのできる人がスウェーデンでは良しとされ、求人広告にも採用条件として「自分で自分の責任を取る、自分で判断して働ける」などの記載があるほどです。そして子どもたちも、自分を知り、自分の意見を持ち、自分の意志で行動できるようにと育てられます。

とはいえ、子どもは親元で暮らすのが当たり前。「自立」に憧れはしても、物理的な一人立ちは、まだまだ先のことです。何もかも自分の好きなように判断するなど、許されません。

そんな時、家族と離れ、たった一人で「ごたごた荘」に住み、自分で何もかもを、自由に行っているピッピに出会ったならば…本を開いた子どもたちが、たちどころにピッピの物語に夢中になるのは、とても自然なことなのでしょう。

ごたごた荘の隣家で、まじめな両親とともに暮らすトミーとアンニカ。物語の中でしばしば彼らが醸し出す「家族のぬくもり」は、ピッピの「孤独」をくっきりと浮かび上がらせます。「ピッピは寂しくないのかしら…」――しかし、ピッピの「強さ」は、読み手の胸をよぎる寂しさや不安を、あっという間に別の感情へと変えてくれます。称賛、感心、憧れ…尊敬とも言いたくなるような感情――寂しさや不安を乗り越えた場所にある「明るさ、強さ」を、リンドグレーンは物語を通して私たちに教えてくれます。

『長くつ下のピッピ』
桜井 誠 絵

南太平洋での冒険旅行から帰って来た夜、両親のいない家に帰るピッピを心配し、トミーとアンニカは、「うちに泊まりにおいで」と誘いますが、ピッピは「結構よ」と答えます。

「でも、かんがえてごらんよ。うちの中は、すごく寒いにきまってるよ。」と、トミーがいいました。「だって、ながいこと、火をたいてなかったんだもの。」

「なによ、そんなの。」ピッピはいいました。「心があったかくて、とんとんと脈をうってれば、ここえるなんてことはないわ。」

リンドグレーンの作品には、ピッピの他にも、自立した主人公が多く描かれています。「やねの上のカールソン」、「山賊のむすめローニャ」…どの子も自分のおかれた境遇、環境を受け入れ、幼いながらも自分の力でものごとを判断し、生きています。大人に保護され、甘えるだけではなく、「一人の人間として強くあれ」という、リンドグレーンのメッセージは、主人公たちの潔い言動を通して、読み手の心に染みていきます。

「家族」のぬくもり

そしてもう一方で、「個」同士がしっかりと結びつく、「家族」のぬくもりが、そこここに散りばめられているのも、リンドグレーン作品の特徴です。日本の子どもたちにも人気のある「やかまし村」シリーズもその一つ。ベニガラ色の家が3軒並ぶだけの小さな村で、繰り広げられる子どもたちの愉快な日常。私たちはスウェーデンの農村の文化や習慣を知ると同時に、その中心にはいつだって「家族」というあたたかい絆があるのだということに気づかされます。

イースター、クリスマス、誕生日、種まき、大晦日…家の中を飾りつけたり、おじいさんの昔話を聞いたり、手伝いをしたり、喧嘩をしたり…家族で過ごす楽しい時間は、真の豊かさに満ちています。子どもは大人にたっぷりと甘え、自由を許され、叱られ、愛される…作品中、大人の姿はそれほど多く登場しないのですが、「家族」という揺るがない基盤があるからこそ、安心できる家があるからこそ、子どもたちが思い切り遊べるのだということは、文章のあちらこちらから、しっかりと感じ取ることができます。

『やかまし村の子どもたち』
イロン・ヴィークランド 絵

生きる楽しさ、生きる力

あたたかな家族の繋がりが、一人で胸を張って生きていくための土台になる――リンドグレーンはそれを充分に理解し、自身の経験から確信していました。遊んで、遊んで、遊び込んだ子ども時代の終焉とともに、憂いの多い10代、迷いと孤独を経験する20代を迎えたリンドグレーン。その辛い時期を支え、乗り越えさせてくれたのは、他でもない、家族との思い出…守られ、育まれた記憶でした。彼女はどんな時にも、生き生きと輝いていた自分の子ども時代を忘れることなく、やがてその思い出を、物語へと変えていったのです。そしてその作品の数々は、どんな教科書よりも面白く、どんな説教よりも身近に、スウェーデンの子どもたちに、ひいては世界中の子どもたちに、生きる楽しさ、生きる力を教えてくれることになるのです。

子供たちと一緒に遊ぶリンドグレーン
出典：『愛蔵版アルバム アストリッド・リンドグレーン』

「長くつ下のピッピ」も、リンドグレーンの「家族への思い」があればこそ生まれてきました。自由気ままに生きるピッピの姿に胸はずませてページをめくる時、得も言われぬ楽しさと憧れ、そして不思議な安心感を感じるのは、物語の根底に流れる、リンドグレーンのこの家族へのあたたかな思いがあるからなのです。

※文献は岩波書店発行、アストリッド・リンドグレーン作『長くつ下のピッピ』（大塚勇三訳）によります。

Present

リンドグレーンの代表作『長くつ下のピッピ』を抽選で3名の方にプレゼントいたします。ご希望の方は、同封のコミュニケーションカードまたは官製はがきに、賞品名・住所・氏名・年齢・電話番号・メールアドレスを明記の上、ご応募ください（11月20日消印有効）。官製はがきでご応募の場合、P.26の「お便り募集」の宛先までお願いいたします。なお、当選者の発表は賞品の発送をもってかえさせていただきます。